

マハティール前首相、UMNOを離党（2008.5.19）

マハティール離党について

橋本文子

（ジェトロ海外調査部付）

マハティール前首相の UMNO 離党のニュースは、驚きをもたらしたものの、何となくその気持ちもわかるような気がた。私は政治の専門ではないので総選挙を現地で見てきた「五感」に基づいた自分の考えをご紹介します。

総選挙当日、私は友人が待つ UMNO 党本部のメディアルームに深夜過ぎに駆け込んだ。前回選挙のときは、当選が決まるたびに歓声が挙がっていたようだが、今回は、まばらな拍手が聞こえるくらい。

何故、与党が大敗した（それでも過半数は取ったけど・・・）のかと良く聞かれるが、やはりアブドゥラ首相の方向性が見えにくいというのがあるのではないかと思う。選挙はしないと言った直後の閣議の「解散」。ポーカーフェースを演じるあまり、国民は不信感を抱いた。

生活は、食品をはじめ物価はかなり上昇し、Pasar Malam で50リングはあっという間に飛ぶ。ガソリン価格をはじめ、公共料金も上がった。駐在員として住んでいた私ですら、これらの物価の上がりを実感した。にもかかわらず、選挙後に再度ガソリン価格を上げるという宣言があった。

また、首相が公約に掲げていた汚職撲滅は一向に進まず、経済も「これ」といった成果が見えない。それどころか期待された国家自動車政策で車の価格は下がり、中古車価格が値崩れを起こし却って新車は売れなくなった。ブミプトラ政策継続の明言化、UMNO 党大会で Keris を振り回したことはノン・マレーの不安をかきたてた。そして、インド系の神聖の場である寺院は、サミーヴェルが両手を上げて止める横でお構いなく壊された。

明るいニュースもあった。新しいショッピングセンターができ、マレーシア初の宇宙飛行士が誕生した。公務員はお給料が上がった。

独立から50年が経ち、ちょうど、マレーシアは過渡期にいる。ひとつには民族間の不信が高まりつつあること。独立時に民族同士の融和を尊んだ切実な思いは、戦後時代の世代が増え

たことで現実社会では薄らいた。独立の団結をテーマにした映画があつという間にオンエアーから姿を消したのも良い例だし、DVD が出る気配もない。さらに、都市部を中心とした治安や社会問題も深刻化している。

マハティール長期政権からアブドゥラ政権に移行し、変化を求めている国民。しかし、いまひとつ核とした成果が見えず、しかも生活の上ではもやもやとした状態が続き、国民は自分たちの声が届いていないと感じた。そうした中、独立系情報ソースとするインターネットサイトが、政府高官のばくろ話やアブドゥラ首相の娘婿の素性などについて書きたてた。後に、編集長は嚴重注意されたが、これまで不透明なお金の動きなどタブー視されていた諸問題を正面から指摘する情報に、国民の関心は集まった。

上記のような出来事の中で、国民が民意を反映させようとしたのが今回の総選挙だ。国民の変革の第一歩が認められ、誰もがこの選挙を受け「これから変わる」と期待に胸をはずませ、笑顔で語ってくれた。それから2ヶ月。政権は変わっただろうか。格差の解消に関する具体的な政策はいまだに聞かれず、野党からの寝返りを禁止する法を作るとし、やもすれば「保身」に写る。結局いつもの顔が残っているし、国民が要求する変化のスピードをうまく吸収できていないことに、マハティールの気持ちは動いたのではないかな。

マハティールが降りたのは健康のせいではという説もあるが、アブドゥラ首相が国民の支持を失っているのが明らかになってさえも、誰一人、その対抗馬として国の将来を考え、政権(与党)を変えていこうとする勢いのある人材が出てこないことに嫌気が差した、というのが本心ではないかと思う。

マレーシアのリーダーとして特に必要とされるバランス感覚そして多民族を支える明確な「夢」とそれを実現する指導力。それが欠けると感じる今、国民が自分たちの力で何かをしようとし始めている。大勢の人がそれぞれ動いたとき、どの力に引っ張られていくのか。隙間から何かが落ち、バランスを失わないよう、今こそ次の先手が必要なのではないかな。それを、マハティールはじっと心配しながら見つめているような気がする。■